佐藤誠三郎論ノート

酒井　大輔

第 3 回日米政治学史茶話会（明治学院大学 2019.6.1）

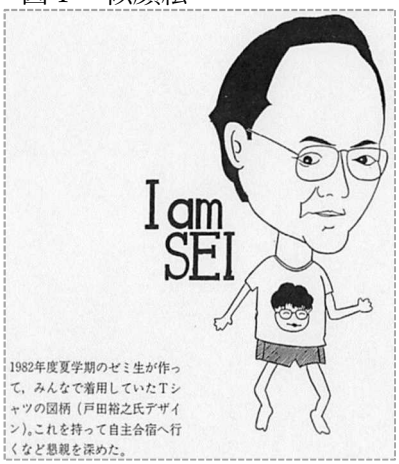
1　本報告の目的

- 佐藤誠三郎（1932–1999）は、80 年代日本の「政治学の科学化」の潮流の中、日本の実証的な政治研究、ないし政治科学の先駆者として評価されている。
- ところが、佐藤は「政治学は科学ですか」という「意外」な発言(91 年)で政治科学に否定的（河野 2018）。
- どういうことか。本報告は、この河野勝の驚きを出発点に、佐藤の研究関心・方法・理論の大枠の変遷をたどる。主に研究者としての佐藤誠三郎を過程追跡 process tracing することで、政治学史上の特異性を考える。

2　前史（研究者になるまで）

- 1932 年東京生まれ。中学の頃、疎開先（茨城）でエンゲルスに魅了される
- 1951 年（高校 2 年）遠山茂樹『明治維新』に感動→明治維新研究を志す
- 1952 年（高校 3 年）日本共産党に入党。
- 1953 年、東大入学。文学部国史学科にすすむ。
- 1956 年、丸山眞男の論文「「スターリン批判」の批判」に衝撃をうける
  →「敗北を認め、マルクス主義との決別を決意する」。
- 1957 年文学部卒業。翌 58 年法学部に学士入学。岡義武の演習に参加。
- 1960 年法学部卒業。岡の助手に採用。明治維新研究を進める。
- 1960 年 6 月、樺美智子合同慰霊祭を主催。新左翼にシンパシー。
- 1963 年、立教大講師。

図 1　似顔絵

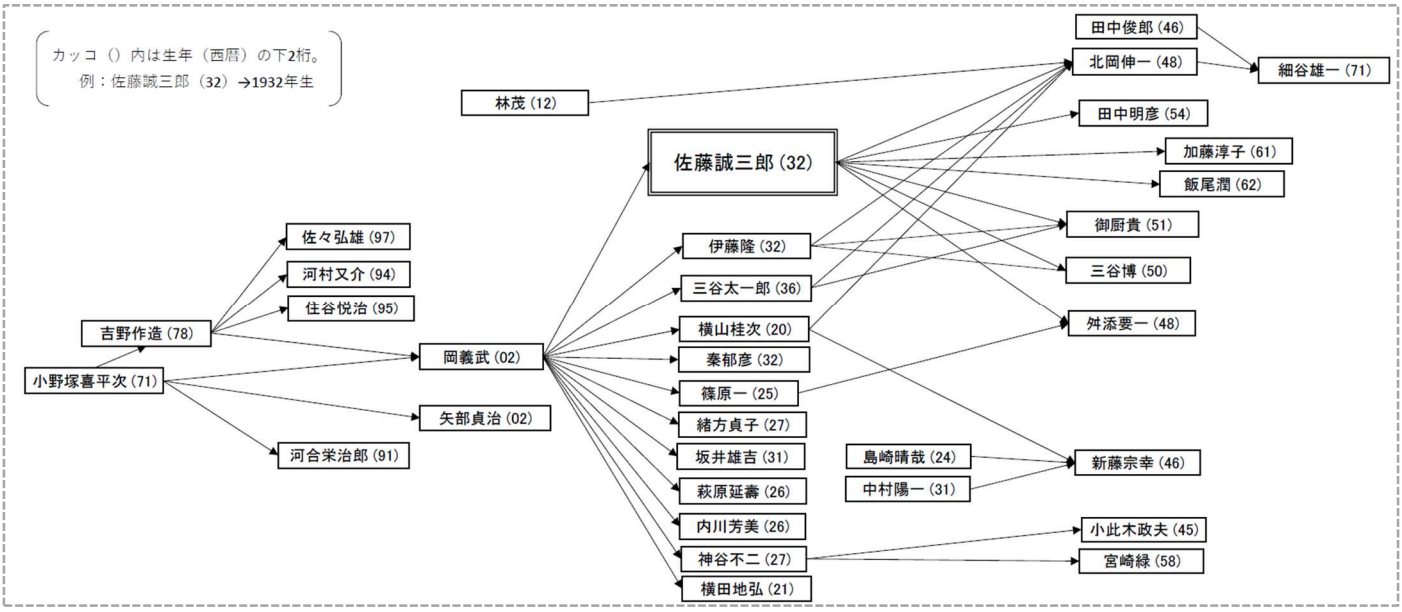


出典：佐藤誠三郎先生退官記念会(1992)

T シャツの顔は妻の佐藤欣子。

ゼミではセーザブローと呼ばれていた。

図 2　師弟ネットワーク[1]



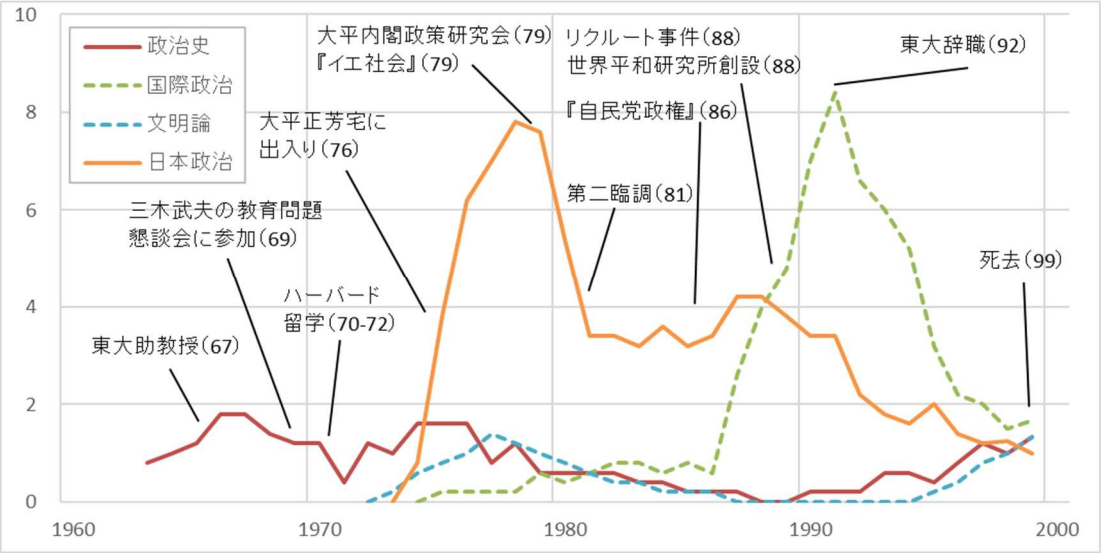
[1] ソースは Wikipedia の記事から取得。佐藤誠三郎に直接関係ないノードは大幅に省略。師弟関係ネットワークの分析はあまり蓄積がないが、先行研究にノーベル経済学賞受賞者の師弟関係を図示した Tol（2018）がある。

3　時期区分（政治史研究→文明論と日本政治論→国際政治論）

- 政治史研究者の道を歩みはじめた佐藤誠三郎。しかし彼は、その後異なる方向に舵を切っていく。
- 図３によれば、佐藤誠三郎の文章をテーマ別に分類すると、３つの時期に分けられる。

　　60 年代～70 年代前半　　……政治史研究の時代。
　　70 年代中頃～80 年代中頃　……文明論と日本政治論の時代。現実政治のコミット増加
　　80 年代末～90 年代末　　……国際政治論の時代。日本政治論は減少していく。

図３　佐藤誠三郎の業績数／年（５年移動平均）



- 佐藤の論考（座談会、エッセイ等含む）をテーマごとに4分類。
- 4分類に収まらないテーマ（大学論など）は記載していない。

- この研究関心の変化は、佐藤誠三郎の中ではどうつながっているのか？

4　政治史研究の時代（マルクス主義歴史学との対決から近代化論へ）

- マルクス主義からの離脱→理論的基盤の模索
　　→「学部でも大学院でも、佐藤誠三郎君、渡邉昭夫君、それから鳥海靖君たちと自主ゼミのような形で勉強していました。…みんな左翼から離脱した連中で、マルクス主義からいかに抜け出すかを考えていました。でも、まだ自分自身の拠って立つ理論、基盤がない。だからそれを議論し、模索していたのです。」（伊藤 2015: 15）
- 初の論考（共著）で遠山茂樹らマルクス主義史学に対し、その硬直性、非実証性を痛烈批判。（伊藤他 1963）
　　→「この論文が投稿されると大問題になります。…歴研への縁切状のようなもので…これ以降、私たちのグループは歴史学研究会から排除され、お互いにまったく近づかない…」（伊藤 2015: 38）
- マルクス主義との対決を経て、佐藤がたどりついた場所：
　　①実証主義（方法）、②日本の近代化の例外的「成功」（研究対象）、③近代化論（理論枠組）
- ①佐藤の明治維新研究の特徴のひとつは、「非常に実証的な研究」（五百旗頭真）であること。
　　→岡崎久彦の佐藤解釈によれば、当時隆盛していたマルクス主義史学に対抗するためには、「ここまで実証的に書かないと書けない」（岡崎・五百旗頭 1993: 104）
　　→しかし他方で、「実証のための実証」は避けるべき態度[2]。

[2] 佐藤は江戸時代のある学派の歴史研究を評価して、研究が「精緻化」された一方で、「即物的・実証的研究」、

・　②佐藤は、日本の近代化の例外的「成功」へと研究の焦点を絞っていく[3]。

→とくに、19 世紀中葉日本をおそった「西洋の衝撃」への対応をめぐる、当時の政治指導者たちの「血みどろな模索と努力」「政治指導」に関心を寄せた論文を発表していく。（佐藤 1965a; 1965b; 1967）

→マルクス主義への対抗意識。佐藤によれば、「明治維新の系統的分析は、近代日本の根底的批判を志向したマルクス主義者によって、はじめて着手された」ために、「彼らが近代日本の『成功』にではなく、その『問題性』に主として関心を持ちやすかったのは、ある意味で当然であった」。

・　③やがて佐藤の理論枠組は「近代化論」に傾斜していく。

→68 年遠山らとの座談会に臨んだ佐藤は近代化論を強く擁護。近代化論批判に反駁し、遠山から「君の近代化論批判に対する批判はたいへん主観的だと思うんだよ」と怒りを買っている。（大江他 1968）

→「ライシャワー路線」、比較近代化論への関心の増大。

→脚注で富永健一『社会変動の理論』（1965）への参照指示。（佐藤 1967: 3）

→さらに「近代化論」で明治維新から高度成長期までを見渡そうとする。（大江他 1968: 19）

・　そしてハーバード留学の機会を得た佐藤は、当時ハーバード大にいたライシャワーを訪ねるまでになった[4]。

5　文明論と日本政治論の時代（比較近代化論から臨調政治へ）

・　では佐藤はその後、近代化研究の道を進んだのか？　→しかし……

＜前半：文明論と大平研究会＞

・　帰国から 3 年後、佐藤は村上泰亮・公文俊平と共著で文明論を『中央公論』誌上に発表しはじめる。

→「日本近代化分析 1 ――戦後思想における近代日本像」（1975 年 6 月号）ほか 3 編

→佐藤らの「イエ社会」論は、現代が重大な変化の局面にたつ――⑴追いつき型近代化という目標の達成、⑵新しい中間階層の成立――との認識のもと、マルクス主義とも行動論的なライシャワー路線とも異なる比較近代化論の可能性を示した。

・　佐藤はこの文明論で、現代、日本のおかれた歴史的位置、目指すべき方向を直接論じるようになった[5]。

→近代化日本では、「行政」を社会全般から遮断し超然化する「遮断する政治」が行われた。また、戦後は「官僚・財界・保守党政治家からなる戦後型多元的統治構造」が政権を安定化させた。

→追いつき型近代化が達成された今、新しい中間階層が誕生。保革対立が無意味化。

→従来的な利益配分政治を批判し、「政策体系に責任をもつ政治」を目指すべきとする。

・　この頃から（1976～）、佐藤は香山健一とともに、大平正芳宅に出入りする（森田 2010: 166）。

→76 年から『諸君！』『文藝春秋』、77 年から『月刊自由民主』で日本政治の時評を頻回に執筆。

→76 年～政策構想フォーラムで政策提言。

→79 年『文明としてのイエ社会』刊行。同年、大平の政策研究会で環太平洋連帯研究グループ幹事。観念的だった大平の研究会と、佐藤の文明論は相性が良かった。自民党政治へのコミットは決定的に。

「緊張感の減衰」、「状況追随的説明」、「実証のための実証」、「歴史にたいする原理的考察はむしろ失われがちであった」と手厳しい（佐藤 1965c：27-28）。

[3] 「本稿の目的は、近代化の比較研究においてしばしば注目されている（しかし決して十分に解明されているとはいえない）、日本のこの例外的「成功」を可能にした国内的基礎条件が、いかなるものであり、それらが幕藩体制と呼ばれている伝統的社会の下でいかに準備されたかを、明らかにすることにある。」（佐藤 1967：3）

[4] 1970～72 年。ライシャワー（1987：473）は佐藤が当時訪ねてきたことを回顧録に記している。

[5] 「脱『保革』時代の到来」。以下引用は同論文から。

＜後半：日本政治論と第二臨調＞

・ 81 年に第二臨調、行革審参事となった佐藤。

→佐藤が進めた「臨調型政治」は、従来的な利益配分政治、多元主義政治を打ち破り、トップダウン式で政治指導者のリーダーシップを貫徹する政治スタイル。

→行革に反対する与野党に対し、佐藤は「反行革不潔同盟」（佐藤 1982）と呼び、反対の論陣を張る。

・ 83 年、あるミーティングで松崎哲久と出会い、佐藤はその場で松崎に共同で自民党研究を提案する。

→「先進民主主義国の中でも代表的な優越政党である自民党が、一党優位を確立して政権を掌握し続ける基本的事実を肯定的にとらえながら、数量的かつ実証的に検証する研究を共同でやらないか」（松崎 2002）

→この共同研究を始める時に、党の関係者の了解を求めたという。（佐藤他 1986: 102）

・ 84 年、松崎と共著論文「自民党超長期政権の解剖」をはじめとする自民党研究を発表。

→佐藤は現代日本の政治システムを「自民＝官庁混合体に方向づけられた多元主義（キャナライズド・プルーラリズム）」と解釈する。（86 年の書籍化時には「仕切られた多元主義」に修正。）

→このシステムは 70 年代までに完成し、議員のキャリアパスなどの制度化が進行した。だが現在、「技術革新・豊富化」と「国際化」によって「仕切り」が曖昧化し、このシステムは危機に陥っている。

→「自民党の行政機構への影響力の増大は、タテワリの各省庁（さらには局や課）と自民党政調各部会や「族」との結びつきを強化し、政府と与党の双方における意思決定の断片化を推進した。その結果は……新しい事態への対応能力の弱体化であった。」（佐藤 1983: 71）

→従来的な利益配分政治を改め、政治指導者がリーダーシップを発揮して日本の方向を提示すべきだ。

→「デモクラシーだけでは政治はうまくいかない。どうしてもアリストクラティックな要素が必要である。」（佐藤 1986: 13）

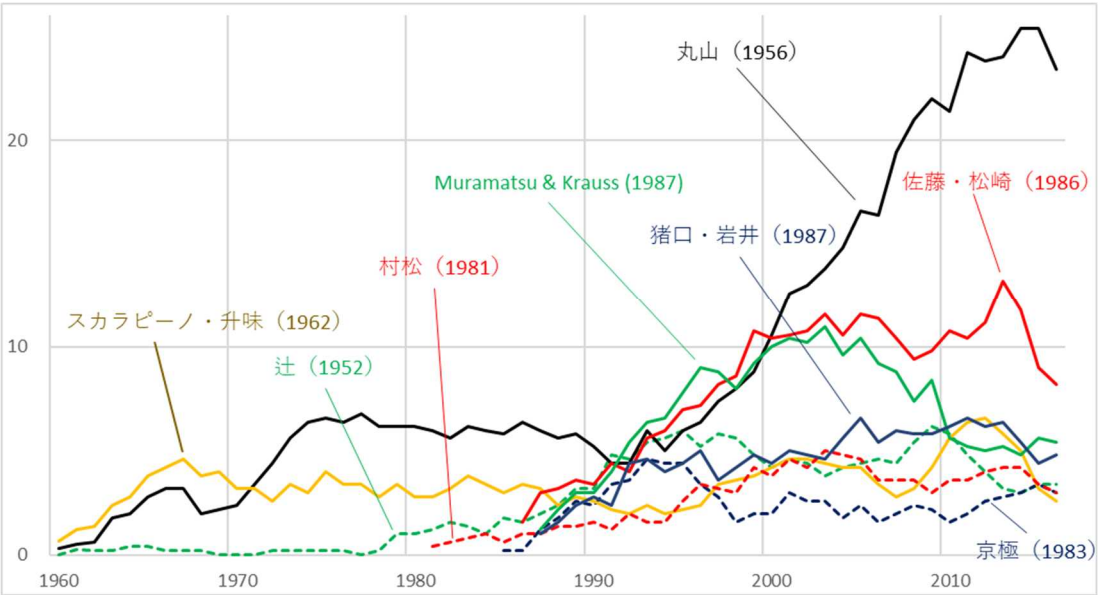
・ 佐藤にとって日本の多元主義は「過去の成功例」だったが、今後は相応しくない批判対象だったことに注意。

→多元主義ではなく、むしろ臨調政治こそ佐藤にとって目指すべき政治スタイルに近かった。

→この時期、「小選挙区制と比例代表制との併用方式が導入されるべきである」と意外な発言をしたこともある（佐藤 1978）。（→ただし、次第に中選挙区制の効用を説くことが増えていく。）

→中曽根内閣期を、佐藤や香山健一らを理論的指導者とする「日本型多元主義の頂点」とみなす議論もあるが（中北 2014）、佐藤を日本型多元主義の擁護者とするのは後年からみた一面的評価ではないか。

図 4　主な日本政治研究書の被引用数／年（5 年移動平均）



・ Google Scholar から被引用数を取得。
・ 外国語訳があるものはそれも含む。

・　佐藤・松崎『自民党政権』（1986）は学問的に大成功をおさめた。
・　図 4 によれば、『自民党政権』は、丸山眞男『現代政治の思想と行動』（1956）についで被引用数が多い。世界の研究者へのインパクトは抜きん出て多い。
・　研究者としての佐藤の一番の成功は、自民党研究をおいて他にない。その一方、『文明としてのイエ社会』（1979）や政治史研究はほとんど引用されていない。

出典:『文藝春秋』1977 年 2 月号

6　国際政治論の時代（政治的失脚、指導者民主主義へ）

・　80 年代は佐藤の学問的、政治的成功の黄金期だった。かのように見えた。
・　87～88 年、東大中沢事件。駒場の「反佐藤」の空気が吹き上がる（西部 1988）。
・　88 年、リクルート事件発覚。公文俊平を含む多くの関係者が、リ社株を受け取っていたことが判明。
　→佐藤自身の関わった臨教審にもリクルート疑惑が波及。
　→以後しばらく、佐藤はリクルート事件の「火消し」ともとれる発言を繰り返す。
　　「リクルート事件は「底なしの構造汚職」とか、「ロッキード事件以上の大疑獄」とかいったものでは絶対になく、せいぜいのところ些細な汚職事件にすぎない」（佐藤 1989: 97）
　→佐藤、香山といったブレーンたちの政治的求心力の急激な低下（中北 2014）
・　中選挙区制度、政治資金制度への批判で世論が沸騰。90 年代にかけて政治改革が一大政治的争点に。
　→佐藤は中選挙区制の擁護論者として、選挙制度改革論者への執拗な批判を晩年までつづける。
　→ここで中選挙区制は、派閥間の競争を活性化させるものとして肯定的に理解。（佐藤 1989; 1993; 1997）臨調政治を推進した佐藤からすれば、本来、佐々木毅らの選挙制度改革論と共鳴してもおかしくなかったはず。しかし、そうした身のこなしができる余裕を、当時の佐藤は失っていた。
・　国内政治への発言はしだいに減少し、かわって国際政治の時評が増加していく。
　→冷戦崩壊による国際関係の急変のなか、日本が責任ある役割を担うべきことを主張。
　　しかし、その発言の多くは評論的性格が強く、政治学的分析としての評価は難しい。
　→88 年、中曾根の主催する世界平和研究所の創設に参画、所長代理。
・　非自民、マスコミ、世論、（大衆）民主主義にたいする嘆きや非難をくりかえす。
　→大衆民主政の「ヒステリー現象」が政治改革ムードを後押しし、真に必要な政治を毀損するものであると佐藤はみていた。
・　「唯一健全な民主主義ともいうべき「指導者民主主義」」（中曾根・佐藤・村上・西部 1992: 321）
　→「貴族的精神が脈々と社会の中枢部で生きていて、それに民主主義制度がセットしているときに、政治はうまくいく」（佐藤 1991: 21）
　→失意の中、佐藤は政治と学問の表舞台から姿を消していく。
・　92 年東大辞職。晩年は政策研究大学院大学で教育に尽力する。
・　99 年、肝臓疾患[6]で死去。享年 67 歳。葬儀では伊藤隆、北岡伸一、御厨貴、飯尾潤らが棺を担いだ。

[6] ［後日追記］当初、本ペーパーの報告時には「C 型肝炎」と記載していた。各種資料を確認し修正を行った。

7　おわりに（知識人としての政治学者）

- 佐藤誠三郎は政治科学の先駆者だったか？――研究規範の観点から
- 研究規範①　実証主義の重視（既述）
- 研究規範②　実践性の重視

  →御用学者だという批判にたいし、佐藤は「民主主義の原則からいえば、政治指導者から求められれば意見をいうのが、市民としての義務じゃないですか」と西部に語る（西部 1988: 101）
- 佐藤の学問観

  →「政治学は科学ですか」と河野勝に問いただした年の前年（1990）、佐藤は、よく似た口論を某政治学者（氏名不詳）と行っている。佐藤が「現実社会にコミットしてない社会科学者というのは形容矛盾だ」と言うと、その政治学者は「自分はそうは思わない。自分は学問にコミットしている」と応えたという。佐藤の考えでは、「人間とその社会に対する深い関心とコミットメントなしに社会科学を生き生きと研究することは不可能」であり、「政治学のための政治学など私には想像できない。」（佐藤・西部 1990: 164-5）

  →大嶽（1983）の「日本政治の将来よりも、日本の政治学の将来に大きな関心をもっている」と好対照。

  →「現代をきちんと語れない学者は失格です。」（佐藤誠三郎先生退官記念会 1992）
- 他方で、「蓄積的な知識体系の構築」（cf. 酒井 2017）という研究規範は希薄。

  →「人間社会」を対象とする学問は、「自然科学（より正確には「仮説－検証」型の学問）と同じ意味での科学ではありえない。」（佐藤 1999: 41）

- 佐藤の研究行動は、あきらかに旧世代に属している。当時の「科学化」の潮流の中で、佐藤は実証的な研究をした一方、実践性を重視し、蓄積性への志向は弱かった。「知識人としての政治学者」ということができる。
- しかし、それにもかかわらず、彼の日本政治研究（佐藤・松崎 1986）は圧倒的な存在感を獲得し、後続の研究者たちを刺激し、事実として政治科学の発展に貢献した。
- 言い換えれば、佐藤自身は政治科学に否定的だったが、彼の業績は政治科学の古典として、結果的に「政治学の科学化」の中心的役割を担ったということができる。

出典：佐藤誠三郎先生退官記念会（1992）

参考文献

Tol, R. R. J. (2018). “Rise of the Kniesians: The professor-student network of Nobel laureates in economics”, University of Sussex Department of Economics, Working Paper Series 0518.

伊藤隆（2015）『歴史と私』中公新書。

伊藤隆・佐藤誠三郎・高村直助・鳥海靖（1963）「日本近代史研究の二、三の問題――岩波講座「日本歴史」近代(1～4)によせて」『歴史学研究』278 号。

猪口孝・岩井奉信（1987）『「族議員」 の研究』日本経済新聞社。

大江志乃夫・佐藤誠三郎・遠山茂樹・小西四郎（1968）「座談会　明治維新史研究の成果と課題」『日本歴史』236 号。

岡崎久彦・五百旗頭真（1993）「対談書評 歴史学と国際関係論のあいだ――佐藤誠三郎『「死の跳躍」を越えて』」『季刊アステイオン』28 号。

京極純一（1983）『日本の政治』東京大学出版会。

大嶽秀夫（1983）『日本の防衛と国内政治』三一書房。

河野勝（2018）『政治を科学することは可能か』中央公論新社。

酒井大輔（2017）「日本政治学史の二つの転換――政治学教科書の引用分析の試み」『年報政治学』2017(2)。

佐藤誠三郎（1965a）「西欧の衝撃への対応―川路聖謨を中心として」篠原一・三谷太一郎編『近代日本の政治指導――政治家研究第 2』東京大学出版会。

佐藤誠三郎（1965b）「大久保利通」神島二郎編『現代日本思想体系 10　権力の思想』筑摩書房。

佐藤誠三郎（1965c）「日本史」大久保利謙・海老沢有道編『日本史学入門』廣文社。

佐藤誠三郎（1967）「幕藩体制の政治的特質(1)――明治維新研究への序章」『國家學會雑誌』80 巻 7・8 号。

佐藤誠三郎（1978）「定数是正と選挙制度改正」『月刊自由民主』308 号。

佐藤誠三郎（1982）「反行革不潔同盟」『月刊自由民主』320 号。

佐藤誠三郎（1983）「岐路にたつ自民党政権」『中央公論』98 巻 7 号。

佐藤誠三郎（1986）「民主主義と社会変化（上）」『経済同友』458 号。

佐藤誠三郎（1989）「「けじめ」が必要なのは誰か」『中央公論』104 巻 7 号。

佐藤誠三郎（1991）「日本の民主主義のあり方――民主主義が「最も優れた制度」ではないという認識を」『財界フォーラム』10 巻 2 号。

佐藤誠三郎（1993）「政治改革 八つの誤謬」『中央公論』108 巻 12 号。

佐藤誠三郎（1997）「選挙制度改革論者は敗北した」『諸君！』29 巻 1 号。

佐藤誠三郎（1999）「政策研究院（政策研究大学院大学）における政策研究」『計画行政』22 巻 1 号。

佐藤誠三郎・香西豊・松崎哲久（1986）「柔らかな保守主義の時代」『諸君！』18 巻 8 号。

佐藤誠三郎・西部邁（1990）「四十年の宴のあと」『諸君！』22 巻 2 号。

佐藤誠三郎・松崎哲久（1986）『自民党政権』中央公論社。

佐藤誠三郎先生退官記念会（1992）『知は力なり――佐藤誠三郎ゼミの 25 年』非売品。

スカラピーノ・升味準之輔（1962）Parties and politics in contemporary Japan.

辻清明（1952）『日本官僚制の研究』

中北浩爾（2014）『自民党政治の変容』NHK ブックス。

中曾根康弘・佐藤誠三郎・村上泰亮・西部邁（1992）『共同研究「冷戦以後」』文藝春秋。

西部邁（1988）『剥がされた仮面――東大駒場騒動記』文藝春秋。

松崎哲久（2002）「保守政治をリベラルに探究　深い学識を共同研究と『政権ブレーン』で表現」『月刊日本』4巻2号。
丸山眞男（1956）『現代政治の思想と行動』未來社。
村上泰亮、公文俊平、佐藤誠三郎（1979）『文明としてのイエ社会』
村松岐夫（1981）『戦後日本の官僚制』東洋経済新報社。
森田一（2010）『心の一燈』第一法規。
ライシャワー、エドウィン（1987）『ライシャワー自伝』文藝春秋。